

コミュニケーション英語 I の教科書は内容言語統合型学習 (Content and Language Integrated Learning) の実施に相応しい か？

田中 綾乃

1. 導入

日本では、2018年から次期学習指導要領が導入される。当学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」と「アクティブラーニング」が大きな柱として位置づけられている(文部科学省、2015)。しかしながら、これまで日本で行われてきた教授法を考慮すると、社会に開かれた教育課程へと移行することやアクティブラーニングを実施することは難しいという声もある。そのため、CLIL(Content and Language Integrated Learning)や CBLT (Content-Based Language Teaching)、CBI (Content-Based Instruction)などの比較的新しい教育手法が、懸念されている課題点を克服するものとして注目を集めている。

そのため本論文では、まず現行の学習指導要領の長所と短所を示し、次期学習指導要領と比較する。その後、CLILの特徴と重要性に基づき3つの研究課題を提起する。また、本研究で使用する各教科書の特徴と、それらの評価方法を示す。そして評価結果を基に議論を展開し、今後の展望とする。

2. 先行研究

2.1 学習指導要領

2.1.1 現行の学習指導要領

1947年、文部科学省は教育課程の基準となる学習指導要領を制定した(望月、2001)。その後は、10年ごとに社会的な背景を考慮した上で改訂がなされてきた。現行の高等学校における学習指導要領は2009年に施行され、変化の激しい社会でも生き抜いていくことのできる力という意味で、教育課程全体を通じて「生きる力」の育成を目指している(文部科学省、2009)。外国語科目に関して言うと、以下のように目標が定められている。

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う。(文部科学省、2009、p.6)

英語教育に関しては、コミュニケーション英語 I が必修科目となっており、その目標は以下の通りである

英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする基礎的な能力を養う。(文部科学省、2009、p10)

さらに、生徒が自分の意見や考えを幅広い言葉で表現できるようにするため、生徒が中学と高等学校の 6 年間で習得すべき英単語も 2200 語から 3000 語へと増加した。また、英語の授業は基本的に英語で教え、教師は目標文法を多く使用する機会を提供すべきだとされた(望月、2001)。

2.1.2 次期学習指導要領

次期学習指導要領が 2018 年に施行予定である。この改訂の背景には、日本の高校生自己肯定感の低さや、若者の早期離職率等が関係しており、それらの原因とされたのは、社会人基礎力の低下や職業観の欠如、将来に対して夢や目標のない生徒の増加であった(文部科学省、2015)。そのため、文部科学省は学校から社会への移行がスムーズではないと考え、次期学習指導要領では個別の知識・技能、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力・人間性を系統的に育成することが念頭に置かれた。また、生徒がそれらの力を身に付けられるようにするため、地域に開かれた教育課程とアクティブラーニングの推進も考えられている。アクティブラーニングの特徴としては、個の学習、対話的学習、深い学びがあり、生徒が社会に出てからも主体的に学び続けることを大きな目標として掲げている(文部科学省、2015)。

2.2 CLIL の定義

2.2.1 CLIL の特徴

1960 年代末の産業革命を契機に、ヨーロッパでは環境保護やジェンダーに関する社会的な関心が高まった。しかしながら、そのような様々な変化を巻き起こす社会状況はかつて想定されたことが無かったため、急激な変化をもたらす社会においても生き抜いていくことのできる人材の育成が叫ばれた。特に、自主的に学び続ける能力を意味する“autonomy”という概念が生まれた(Holec、1979)。

CLIL の起源はその産業革命期にあると言われており、多くの原理が自主的な

学びを促すものとなっている。そもそも CLIL とは、Content and Language Integrated Learning の略称で、内容言語統合型学習を意味する。Coyle, Hood, and Marsh (2010)は CLIL を内容と言語の両方を教授するデュアル・フォーカス・アプローチだと定義づけている。また、Bentley (2010)によると、CLIL には5つの目標がある。1つは、新しい概念を母語ではない言語で学習させること。2つ目は、教科と目標言語の両方のパフォーマンスを向上させること。3つ目は、目標言語と母語の使用の両方において学習者に自信を持たせること。4つ目は思考力を高める教材を授業の最初から使用すること。そして最後は、コミュニティの価値と市民性(シティズンシップ)に強いつながりを持たせることである。

また、CLIL にはその核として 4C が位置付けられている。1つ目の C は Cognition (思考)である (Coyle, Hood& Marsh, 2010)。Cognition は4つの C の中でも重要なものとして位置づけられている。この理由としては、CLIL では記憶、理解、知識の活用などの LOTS (Lower-Order Thinking Skills)だけでなく、判断力や評価、想像性などの HOTS (High-Order Thinking Skills)も必要とされるからだ。そのため、Cognition にはいくつかの段階がある。研究者によってその定義は違うが、ここでは Cognition を5つのレベルに分け、それぞれを Perceiving (気づき)、Recognizing (認識)、Judging (判断)、Reasoning (理由付け)、Imagining (想像力)とする。従って、教師は授業中に多様な思考力を使うことのできる機会を提供しなければいけない。2つ目は、Communication (コミュニケーション)である (Coyle, Hood& Marsh, 2010)。CLIL では、学生が話す時間を増やし、教師が話す時間を減らすことを目指している。そのため、学習者が有意義なインタラクションを持てるような工夫が必要である。3つ目は Content (内容)である (Coyle, Hood& Marsh, 2010)。CLIL で教えられる教科は日本語、数学、英語、科学、物理学、生物学、地学、歴史、地理学、政治経済、音楽、体育、美術、家庭科、道徳などである。科目横断的とも言える CLIL の授業は、分かりやすい方法で行われなければならない。4つ目は Culture (文化)と Community (コミュニティ)である (Coyle, Hood& Marsh, 2010)。Culture は4つの C の全てと関連する大切なものである。CLIL では、グローバルな視野と、これからの社会に貢献する積極的な態度を持ち合わせた生徒の育成を目指しているため、多岐に渡る文化的な内容の教授が求められる。

和泉(2012)によると、CLIL には上記に示した原理に加えて、教授法の10大原則を実施することで質の高い教育を達成していることが示されている。この原則は、言語と内容の教授が同量であること、4技能(リスニング、スピーキング、リーディング、ライティング)の統合、タスクを多く与えること、多様な思考レ

ベルを用意すること、ペアワークやグループワークのような協調的な活動を多く取り入れること、内容に国際問題を含むこと、新聞やインターネットのようなオーセンティックな教材を使用すること、言葉だけではなく音や数字、絵などの情報も提供すること、内容と言語の両方において Scaffolding (足場掛け) を用意すること、学習スキルを教えることがそれにあたる。中でも、生徒の自主的な学びを促すためには、Scaffolding が大切だとされている。

また Bentley (2010) は、CLIL の種類を大きく 2 つに分けている。1 つは Soft CLIL というもので、教育課程の一部分だけで内容を教えるというものだ。もう一方は Hard CLIL と呼ばれ、教育課程の約半分を目標言語で教えるイメージのプログラムのようなものである。

上記のように CLIL には明確な特徴がある。一方で、CBLT (Content-Based Language Teaching) と CBI (Content-Based Instruction) は、それらと似た特徴を持っていることから、次ではそれらの違いについて議論したい。

2.2.2 CBLT と CBI との比較

三者の大きな違いとしては、CLIL では内容と言語の両方の教授を通して社会と授業に繋がりを見出すことを目的としているが、CBLT では必ずしも教育課程や教科書に準拠した授業でないこと (Nesme, 2016)、CBI では第二言語の習得を促進するための学習スキルを身に付けさせることがその目的となっている点である (Addison & Walker, 2011)。

今回 CLIL を研究対象とした理由は、次期学習指導要領で「アクティブラーニング」や「社会に開かれた教育課程」が大きな柱として据えられており、CLIL の原則がそれらを満たすと考えられたからである。一方で、CLIL が学習指導要領に沿った特徴を有していても、日本の高校生がもつ CEFR のレベルを考慮すると (Language Policy Unit, 1971)、その実施が難しいという課題がある (Ikeda, 2013)。なぜなら、CLIL は CEFR の B1 レベル以上でなければその実施が難しいと言われているからだ (Cenoz, Genesee & Gorter, 2013)。そこで本研究では、高等学校における必修科目であるコミュニケーション英語 I の教科書を活用した CLIL の効用性について議論する。

2.3 研究課題

これまで、日本における英語教育の現状や、CLIL が地域に開かれた教育課程やアクティブラーニングのような次期学習指導要領の目標を網羅するものとして期待されていることが議論されてきた。一方で、CLIL には求められる生徒のレ

ベルが CEFR の B1 以上であることなどが欠点として挙げられた。それらに基づき、著者は以下に示す 3 つの研究課題を提起する。

- 1 現行の学習指導要領に従って編集されたコミュニケーション英語 I の教科書はどの程度 CLIL の原理を含んでいるか。
- 2 どのような種類の教科書が最も CLIL の原理を反映しているか。
- 3 教科書を活用した CLIL の実施は、学習指導要領が提唱する新しい英語教授法として相応しいか。

上記の課題を解決するために、次章では 4 つの教科書を取り上げ、評価基準に基づきそれらを比較することとする。

3. 研究方法

3.1 各教科書の特徴

本研究では、CROWN、WORLD TREK、Vivid、Genius の 4 つの教科書を選定した。選定理由は、CLIL の中で重要だとされている Cognition と、自主的な学びを促すための Scaffolding に関係している。そこで、以下では各教科書の特徴を紹介したい。

まず、CROWN についてである。全 192 ページで編集された CROWN は、5 つの特徴を持っている。1 つは、生徒に興味と、時代を反映する内容を与えることである。2 つ目に、言語材料は容易なものから難解なものへと移り変わっていくが、内容を定着させる復習の機会が設けられていることである。また、多くの写真が内容理解を促す点や、生徒が英語で考え、英語でコミュニケーションを取る機会を設けている点も挙げられる。最後の特徴は、様々な選択可能な学習教材が含まれている点である。

次に、WORLD TREK について紹介したい。当教科書は全 160 ページであり、3 つの特徴を有している。まずは、内容が生徒の興味関心を惹くものになっている。次に、実社会で役に立つ容易な単語が多く含まれているという質の高さが挙げられる。そして、各生徒が自分の学習ペースに合わせられるように、スモールステップが用意されている。

また、全 160 ページからなる Vivid は、3 つの特徴を持っている。1 つは、中学校と高等学校の連携を視野に入れているという点だ。2 つは、生徒の確実な内容理解を図ることだ。そして、教材が生徒の興味に沿ったものになっている。

最後に、Genius について紹介したい。当教科書は全 208 ページであり、4 つの特徴を有している。1 つは大学入試に頻出するトピックが扱われており、生徒の論理的思考力を上昇させることを狙いとしている点だ。次に、多様な読み方を

生徒が身に付けられるよう、アクティビティに工夫がなされている。そして、オールイングリッシュの授業向けの教科書構成となっていることだ。

4冊の教科書の特徴から見て取れるように、今回は教科書編成の目的やねらいの異なるものを選定した。各教科書は現行の学習指導要領に基づき編成されているが、中でも「地域に開かれた教育課程」や「アクティブラーニング」、「校種間連携」など、次期学習指導要領で重要視される内容が特徴に反映されているものを選択した。

3.2 評価項目

前述した通り CLIL はその歴史が浅い教授法であるため、教育成果を測定する明確な評価項目が未だないとされている (Cenoz, Genesee & Gorter, 2013)。そのため、CLIL の核である 4C と 10 大原理に基づき、著者が教科書の評価項目を作成した。ここでは、その各評価項目について紹介したい。

まず、教科書に含まれている写真や質問の数から評価の段階は主に 5 段階とし、数字の大きい方がより CLIL の原則を反映しているものとした。一方で、項目の多い内容や足場掛けに関する質問はその限りではない。また評価の際は、内容に関するものは 70% 以上、5 段階評価のものは 80% 以上の解答を得たものを信頼度の高い結果として採用した。さらに、調査の信頼度をあげるため、今回は著者を含めた 10 人の大学生 (英語教員としての経験あり、または同教員志望の学生) に協力を依頼した。

ここでは、全体の評価について紹介する。表 1 は全体における Cognition の評価を示している。和泉(2012)によると、生徒を様々な思考レベルで考えさせることが CLIL において重要である。そのため、各教科書に様々な思考段階が含まれているか評価するための項目を設けた。

表 1 Cognition の全体評価

Does the textbook include various level of cognition?	Perceiving / Recognizing / Judging / Reasoning / Imaging
---	--

表 2 はどのような内容が教科書に含まれているかを調査する項目であり、国際問題が含まれているか否かが評価できるようになっている (和泉, 2012)。また、内容項目は教科書を概観して著者によって決められた。

表 2 Content の全体評価

What kind of content does the textbook have?	Agriculture / Food / Animals / Nature / energy / Engineering / Space / Medical things / Disabled people / Sociology / History / War / Poverty / Music / Art / Sports / Customs / Education / Laws / Politics / Economics / Traditional culture / International cooperation / Volunteer / Story / Future / School / other things()
--	--

次に、各章ごとの評価項目について紹介したい。ここでは、回答者がプレリーディングパートから章末問題までの約 15 ページを見て評価をすることになる。各教科書の章は、巻頭からほぼ同じ位置にあるもの、つまり学習の時期が同じになると思われるものを選定した。

表 3 は、ある章の中に含まれる写真の数を評価するものである。当項目は、単語だけでなく音や数、写真による情報が提供されるべきだという CLIL の原理を反映している (和泉、2012)。しかしながら、教科書のみから音に関する情報を判断するのは難しいため、今回は写真に関する調査のみとした。また、1 ページに含まれる写真の上限が 2~3 枚と考えられることから、評価の最高は 30 枚となっている。

表 3 Scaffolding 数の章評価

How many pictures does the textbook have as scaffolding?	There are over 30 pictures in a section	There are 20 to 25 pictures in a section	There are 15 to 20 pictures in a section	There are 10 to 15 pictures in a section	There are pictures less than 10 in a section
--	---	--	--	--	--

表 4 は写真の種類を評価するものである。これは、Scaffolding に多様な種類が求められることによる (和泉、2012)。そのため、実際の写真に加えて地図や年表などが含まれているものを高評価として扱った。

表4 Scaffoldingの種類における章評価

Are pictures helpful to understand the content?	They are enough to understand the content, e.g. real pictures, maps, history lines, rates, and so on	They are good to understand the content but not in detail, e.g. only real pictures or maps	They are sometimes helpful to understand the content, e.g. various types of real pictures	They are not good to understand the content, e.g. only one type of real pictures	They are not helpful to understand the content at all
---	--	--	---	--	---

表5は4Cの中のCommunicationに関する項目である。これは、和泉(2012)がペアワークやグループワークなど協調学習の重要性を示したことによる。

表5 Communicationの章評価

To what extent does the textbook give students the opportunities to communicate?	It has over 4 communication opportunities such as discussing questions	It has 3 communication opportunities such as discussing questions	It has 2 communication opportunities such as discussing questions	It has 1 communication opportunities such as discussing questions	It has no communication opportunities such as discussing questions
--	--	---	---	---	--

表6は、CultureやCommunityに関する質問である。生徒が地域や社会について考える機会を提供しているかを評価するものだ。

表6 Culture&Communityの章評価

Does the textbook have application questions so that students can think about their society or community?	It has over 4 questions that relate the content to students' lives	It has 3 questions that relate the content to students' lives	It has 2 questions that relate the content to students' lives	It has 1 questions that relate the content to students' lives	It does not have such scaffoldings in a section
---	--	---	---	---	---

表7は、章の内容が反映している教科科目の評価である。

表7 Contentの章評価

Does the textbook integrate various subjects into one section? What kind of subjects are they?	Japanese / Math / English / Chemistry / Physics / Biology / Geology / History / Geography / Politics & economics / Music / P.E. / Home economics / Ethics / 総合学習 / 特別活動 / others ()
--	--

ここからは、リーディングパートにおける評価項目を紹介する。表8はプレリーディングの部分、表9はリーディングの部分、表10はポストリーディングの部分、表11は章末問題における評価を示している。ここでは、各項目とも、生徒の興味や関心を惹きつけるための工夫や、生徒が内容を確実に理解するための工夫が調査される。

表8 Pre-ReadingのScaffolding評価

What kind of scaffolding for pre-reading does the textbook have?	Listening / Q&A / Key words / Pictures / Introduction of the story / others ()
--	---

表9 ReadingのScaffolding評価

What kind of scaffolding for reading does the textbook offer?	Key words / Pronunciation / New words / Optional questions to catch the content / Pictures / others ()
---	---

表10 Post-ReadingのScaffolding評価

How many optional questions which relate to the contents do the textbook have?	There are over 20 questions in a section	There are 15 to 19 questions in a section	There are 10 to 14 questions in a section	There are 5 to 9 questions in a section	There are less than 5 questions in a section
--	--	---	---	---	--

表11 章末問題におけるScaffolding評価

3-4. Is Japanese used so students can understand directions?	All explanations are in Japanese	75% explanations are in Japanese	50% explanations are in Japanese	25% explanations are in Japanese	All explanations are in English
--	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	---------------------------------

4. 研究結果

各教科書に CLIL の原則が含まれていたことが分かった。特に、CLIL において重要となる内容理解を促す Scaffolding が、各リーディングパートにおける新出単語や写真の挿入などで顕著に見られた。また、各リーディングパートには、内容を掴むための付加的な質問が必ず含まれていた。

また内容に関する評価からは、各教科書とも理科や社会科に関わる内容を多く含んでいることがわかった。従って、教科書を活用するには理科や社会科の教員と共同授業を行うことで CLIL の効用性が高まると考えられた。

一方で、英語によるコミュニケーションの機会を増やすことをその特徴として挙げている CROWN と Genius には、生徒同士のコミュニケーションを促す質問が多く含まれていた。

また、CLIL の 10 大原則のうち、4 技能の統合と学習スキルの教授について触れているのは WORLD TREK であった。

5. 研究課題に対する議論

ここでは、研究課題に対する回答を述べたい。

1 現行の学習指導要領に従って編集されたコミュニケーション英語 I の教科書はどの程度 CLIL の原理を含んでいるか。

各教科書には随所に CLIL の原則が見られた。しかし、CLIL の 10 大原則に含まれている「4 技能を統合した授業の展開」と「生徒に学習スキルを身に付けさせること」について言及しているのは WORLD TREK のみだったため、現行の学習指導要領の下で CLIL を実施するとすれば、4 冊の中では WORLD TREK がその実施に相応しいと言えるだろう。

2 どのような種類の教科書が最も CLIL の原理を反映しているか。

CLIL の原理を反映する教科書の特徴として、①各章の内容理解を助ける多様な写真が含まれていること、②生徒同士のコミュニケーション促す質問が多く含まれており、その質問が章の内容に関するものであること、③内容が教科横断的なものになっていること、④生徒が主体的に 4 技能を統合した学習ができるためのヒントが示されているもの、が挙げられる。

3 教科書を活用した CLIL の実施は、学習指導要領が提唱する新しい英語教授法として相応しいか。

1 より、現行の学習指導要領下でも教科書を活用した CLIL は実施可能という結論が得られた。しかしながら、各教科書には未だ CLIL の実施に不十分な点も

あることから、次期改訂に向けて2に示したような特徴を含む教科書が編集される必要があるだろう。

また、教科書にはそれぞれ特徴があり、CROWNやGeniusでは学習スキルを既に獲得している生徒を対象として教科書が作られたと考えられることから、教師は生徒に身に付けさせたい力を十分に考慮した上で教科書を選定する必要がある。

6. 今後の展望

当研究の課題点として、実際に教科書を活用したCLILの原則に基づく授業を現場で行っていないことが挙げられる。そのため、当研究が確実な成果を上げたとは言い難い。そこで、来年度から教員として働きながら、現場で当研究の実証を行っていききたい。

謝辞

教育学部の学生には、お忙しい中アンケートにご回答いただきました。また、長期間にわたり本論文のご指導を賜ったホール先生をはじめ、英語科の先生方に心より感謝申し上げます。

参考文献

- Addison, M, N., Walker, J, R. (2011). Contending with Content: Notes on Introducing a Content-based Instruction (CBI) Approach in a Media English Course for Third/Fourth Year Elective Students in a Japanese University. *Bunkyo gakuin daigaku gaikokugo gakubu bunkyo gakuin tanki daigaku kiyu*, No.11, 241-257.
- Bentley, K. (2010). *The TKT Course CLIL Module*. Cambridge English.
- Cenoz, J., Genesee, F., Gorter, D. (2013). Critical Analysis of CLIL: Taking Stock and Looking Forward. *Applied Linguistics* 2014: 35/3: 243-262.
- Coyle, D., Hood, P., Marsh, D. (2010). *CLIL Content and Language Integrated Learning*. Cambridge.
- Holec, H. (1979). *Autonomy and Foreign Language Learning*. Pergamon Press, 1-7.
- Ikeda, M. 2013. Does CLIL Work for Japanese Secondary School Students? Potential for the "Weak" Version of CLIL. *International CLIL Research Journal*, Vol 2 (1).

和泉伸一. 2012. CLIL 上智大学外国語教育の新たなる挑戦第2巻. 上智大学出版.

Language Policy Unit, Strasbourg. (1971) COMMON EUROPEAN FRAMEWORK OF REFERENCE FOR LANGUAGES: LEARNING, TEACHING, ASSESSMENT. Retrived from www.coe.int/lang-CEFR

文部科学省. 2015. 論点整理 教育課程改革特別部会.

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/sonota/1361117.htm

文部科学省. 2009. 高等学校学習指導要領

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/eiyaku/1298353.htm

望月昭彦. 2001. 新学習指導要領に基づく英語科教育法. 大修館書店.

望月正道. 2013. WORLD TREK English Communication I. 桐原書店.

村野井仁. 2013. Genius English Communication I. 大修館.

Nesme, A. (2016). Exploratory Survey of Super Science High Schools' English Teachers' Beliefs toward Content Based Language Teaching Methodology. Iwate University, Faculty of Education.

霜崎 實. 2013. CROWN English Communication I. 三省堂.

築道 和明. 2013. Vivid English Communication I. 第一学修社.

(岩手大学大学院教育学研究科教科教育専攻英語教育コース)